

Mariateresa Fumagalli Beonio Brocchieri-
Massimo Parodi: *Storia della filosofia medievale
da Boezio a Wyclif*

Editori Laterza, Roma-Bari, 1989, 500p.

伊 藤 博 明

イタリアの名門出版社ラテルツァ社から刊行された本書『中世哲学史——ボエティウスからウィクリフまで』は、二人の中世哲学研究者の緊密な協力によって上梓されたものである。フマガリ・ベオーニオ・ブロッキエーリは、1933年ミラノ生まれ、アベラールの研究者として著名であり (*La logica di Abelardo*, Firenze 1964; *Eloisa e Abelardo*, Firenze 1984; *Introduzione ad Abelardo*, Roma-Bari 1988), 他に中世の政治思想と倫理思想に関する論考を発表している (*Wyclif. Il comunismo dei predestinati*, Firenze 1975; *Le bugie di Isotta. Immagini della mente medievale*, Roma-Bari 1987). 現在はミラノ大学の中世哲学史講座の正教授を務めている。またマッシモ・パローディは、1948年サヴォーナ生まれ、中世の自然哲学と科学 (*Tempo e spazio nel Medioevo*, Torino 1981; *Scienza e tecnica nel Medioevo*, Torino 1988), 及びアンセルムスの研究 (*Il conflitto dei pensieri. Studio su Anselmo d'Aosta*, Bergamo 1988) に従事している。現在はミラノ大学哲学科の研究員である。なお両者には、中世百科全書についての共著による論文もある (*Due enciclopedie dell'occidente medievale: Alessandro Neckam e Bartolomeo Anglico*, in *«Rivista di storia della filosofia»*, XL, 1985).

本書の目的は、哲学専攻の学生や中世哲学に関心ある者にたいして、中世哲学に関

するやや詳しいガイドブックを提供することに存すると思われる。このことは、本書が収められた叢書が 'Manuali Laterza' であることから推察される。500ページもの著作が「入門書」的性格を帯びうるということは、高校で使用されている西洋哲学史の教科書が全3巻1500ページにも及ぶ (e.g. F. Adorno-T. Gregory-V. Verra, *Storia della filosofia*, Roma-Bari 1973) というイタリアの教育的背景から理解されるだろう。ガイドブックとはいえ、否、ガイドブックだからこそ、中世哲学に関する包括的な歴史を執筆する困難は容易に想像しうる。

近年その量と質において充実した研究が蓄積されつつある中世哲学の領域において、それらの成果を満遍なく視野に入れつつ、また党派的な立場に準拠せずにスタンダードな通史を叙述するという試みは無謀とさえ言えよう。しかしながら、初学者が中世哲学の荒海に乗り出すには信頼しうるチャートが必要であることもまた事実である。そして、当然のことながらそのチャートは現在の学問レベルにおいて描かれていることが望ましく、本書はまさにそれを目指している。無論、本書で示されたチャートの精確さを適切に判断することは、評者の能力の及ぶところではない (そのためには評者自身の「中世哲学史」が要求されるだろう)。以下、著者による「中世哲学」の概念をめぐる見解を紹介し、次いで本書の特色と考えられる点を指摘して、チャートの有効性を見極めるための判断資料を供することにしたい。

著者によれば、「神学の婢女としての哲学」というステレオタイプ化した定式に反して、中世においては様々な定義と種々の役割が哲学に負わされていた。その多様性は歴史的コンテクスト (修道院、都市の学校、大学の学部) や中世の作家たちが参照した源泉の多様性に拠るものである。例えば、サン・ヴィクトルのフーゴは、哲学を理論的原理として実践から区別した上で、人間の活動の全領域において各活動に対応する哲学が存在すると述べている。つまりフーゴにおいては、既存の中世哲学史においてしばしば与えられているような厳密な哲学の定義とは異なり、今日われわれの日常語で用いられている表現 (「私の人生哲学」等) も認容されるのである。ここで著者は P. Dronke がその編著 *A History of Twelfth-Century Western Philosophy* (Cambridge 1988) で示した見解に異議を唱えている。Dronke は、自然学や道徳学と同様に哲学の一部門であった論理学に過度の重要性を与え、哲学の概念の歴史性を犠牲にしているように思える。哲学的諸観念と深い関係にある他の学問領域をなござりにすることは、哲学の概念を知る上で極めて有益な、当時の知的情況についての

知識を欠落させることになるのである。

実際、中世の哲学者たちは、ある特定の領域を専門とする哲学教授であると同時に、しばしば他分野の哲学や神学を研究・教示し、政治的な活動を行い、さらには詩行をも紡ぎ出した知識人であった。当時の学問的課題とは、哲学的探究を可能な限り他の文化領域に拡大し、現実的なコンテキストと密接に結びついた思想の表現である諸文化形態を析出することにあった。フーゴの時代には、哲学は知の全領域を包含するものであり、神学はその一部門である「理論哲学」に属していた。しかし、13世紀に至って哲学の定義と役割をめぐってドラスティックな変容が見られることになる。プラバンのシジェなど「アヴェロエス主義者たち」にとって、哲学とはアリストテレス哲学を規範とする厳密に合理的な思索過程であり、宗教的啓示において付与された確実性とは厳格に区別されるべきものであった。この意味での哲学が対象とするのは、人間の知性によって把握される限りでの議論、すなわち、自然科学的、道徳学的、政治学的議論である。

他方神学は、中世の文化的世界において一つの学問領域となった。それは哲学的探究にたいして統制的限界として、またある時は標準的規範として働いた。神学的探究は無限定的な対象（神、魂、全体性として世界、自己知など）に向かい、神学者たちはここを立脚点として、人間の存在と認識に関わる諸問題の分析へと進んだのである。著者は次のように結んでいる。こうして、中世哲学は古代哲学とは明確に区別され、西洋思想におけるきわめて独創的な期間として現われる。「スコラ的」と呼ばれる分析方法、「図書館」あるいは共通のテキスト（「権威者たち」）への不断の参照、そして名辞論理学の誕生は、古代哲学にたいして中世哲学を特徴づけ、それを近代哲学の必然的先行者として明示する別の側面である。

こうした見取図を提供した著者の立場が中世における哲学と神学を分離する立場、あるいは中世哲学を統一的な信仰的理念との関連で理解しようとする立場と異なることは明白であろう。著者は各時代において「哲学と呼ばれていたもの」を、当時の知的状況の中に置いて描き出そうとしている。この方法は「歴史的記述」とでも呼びうるものであり、記述の対象となる学問領域は狭義の哲学に留まらず広範囲に及び、その結果、本書は様々な分野を横断する「中世思想史」と称されるべきものと化している。

具体的には、第2部第1章「10世紀と11世紀の連続と断絶」は、当時の社会変動から筆を起し、革新下の世界における文化と修道制を論じている。また第7章「新知

識と翻訳」では、12世紀における翻訳の流布とその影響について論じている。第3部第1章「13世紀における学問機関とスコラ的方法」ではパリ大学における制度と教育過程が扱われ、第2章「新百科全書」では、『ディダスカリコン』からルルスまでの百科全書が考察の主題とされている。自然科学についての記述も充実しており、第3部第6章「オックスフォード学派における科学とユートピア」と第13章「自然哲学と科学思想の展開」が置かれている。さらに本書の特色は政治思想に関して十全に論じられていることで、第1部第6章「中世初期の政治思想」、第2部第4章「11—12世紀の政治思想」、第3部第9章「政治思想における大変革」が充てられている。

著者の立場から推察されるように、本書はほぼ編年史的構成となっており、例えば第2部は第1章、第2章「11世紀の哲学と神学」、第3章「アオスタのアンセルムス」、第4章「アベラールの時代」、第5章「再生：12世紀文化の諸側面」、第6章、第7章、第8章「シャルトル学派」、第9章「聖書から新しい神学へ」と筆を進めている。この点から見ると、*The Cambridge History of Later Medieval Philosophy* (eds. by N. Kretzmann, A. Kenny and J. Pinborg, Cambridge 1982) で提示された問題史的構成と比較して「保守的」と思われるかもしれない。中世哲学を現代の哲学的関心から読み解こうとする研究者にとっては、本書は中世哲学を骨董屋のショーウィンドーに再度閉じ込めるものと映るかもしれない。だが「保守的な」評者には、両者の叙述方法が互いを排除するどころか、互いを大いに益するものと思われるのである。

本書の構成について一言付け加えておくと、それはたしかに編年史的ではあるが、従来の通史を無自覚に踏襲しているわけではない。例えば、第3部第11章「政治思想の大変革」に見られるように、トマス・アクィナスからエグジディウス・ロマヌスを経てオッカムとマルシリオ・ダ・パドヴァまで、問題が歴史的に辿られている。従来の通史では、各哲学者を論じる際に個別的に扱われることが多かった。他の箇所にも散見されるこうした叙述方法がどの程度成功しているかは議論の余地があるだろうが、興味深い試みと言えるだろう。

最後に本書のガイドブックとしての価値に関してだが、本文中において哲学者からの引用はすべてイタリア語訳されており、また巻末には主なテキストのイタリア語訳が挙げられている。この点も含めて中世哲学の世界にイタリア語から入ろうとする者には、Cesare Vasoli, *La filosofia medioevale*, Milano: Feltrinelli Editore 1982 [6a ed.], 707p. と並んで本書が有益なガイドブックとなることは確実であろう。